

書評・紹介

篠原寿雄・田中良昭編著

講座敦煌8 『敦煌仏典と禪』

鏡 島 元 隆

このたび、講座『敦煌』八に篠原寿雄・田中良昭二教授の編纂によって、『敦煌仏典と禪』が刊行された。周知のように、インドと中国を結ぶ交通の要衝、敦煌が世界の東洋学者の注目を浴びたのは、一九〇七年のスタンと敦煌との出会い以来のことであり、すでに八十年の歴史を経ている。爾来、敦煌学は東洋学として時代のハイライトを浴びたものとも尖端的な学問となつて久しい。近年、現地への道も開かれ、敦煌と敦煌文物への関心は学界だけでなく、一般人にまで一段と深まったものようである。

しかし、敦煌文献の大部を占める仏典は、すべて中国仏教の最盛期である隋唐時代のものであり、しかも中国本国においてはすでに散逸してしまつた貴重な文献であつて、仏教、とくに禅宗思想の源流を知るには、これを究めることが不可欠の要件であることは分

つていても、一部専門家を除いて、一般研究者にとつてこれに近づくことはほとんど望み得ないことであつた、というのが現状である。といふのは、いづれの学問においてもそうであるが、敦煌仏典の研究も、あまりに細分化され、個々の研究を読んでは、それと仏教全体との連りや、そのの仏教全体において占める位置や意義がさっぱり分らず、結局、敦煌文献は専門家に任せるほかはなく、一般の仏教研究とは何のかかわりもないものと考へられてしまうからである。しかし、それは決してそうではないのであり、そうであつてはならないのである。

たとえば、本書の「総説」で柳田氏が書いてあることであるが、鈴木大拙が日本の盤珪や正三の禅思想に関心をもち、その宗教を再発見したのは、一見ほとんど何のかかわりももたない敦煌本との接触がその原動力であつ

たという。この柳田氏の指摘は、禅を学ぶものにとつては、いづれの分野であつても敦煌本と深い連りが無いものはあり得ないことを、あたためてわれわれに示している。ただ、従来はそのことが分つていても、これに近づけさせてくれるものがなかつたのである。しかるに、ここに敦煌文献に近づけさせてくれる適切な道案内の書が現われた。本講座『敦煌仏典と禪』がそれである。

本書の構成は、まず第一に柳田氏による敦煌禅宗文献の全体にわたる総説を基本とし、以下各説に入つて第二に禅宗の歴史書である燈史の成立とその主張、および燈史のさまざまな発展の跡を追求し、第三に禅宗語録をその成立の次第を追つて検討しつづつ禅の思想的展開をあとづけ、第四にさまざまな禅僧の偈頌をとりあげてその特色を明らかにし、第五に禅僧による経典の注釈書と禅宗内で成立したとみられる偽経についてこれを紹介検討し、最後に中国禅のチベットへの流入とチベットにおける禅の実態についての最近の研究成果を総集して本書の結びとしている。

以上の構成に従つて、本書の内容は、柳田聖山氏の「総説」にはじまり、禅宗燈史の成立と発展については、「北宗燈史の成立と発

展」を椎名宏雄氏が、「南宗燈史の主張」を鈴木哲雄氏が、「禅宗燈史の発展」を田中良昭氏がそれぞれ執筆している。

つぎに、初期の禅語録については、「楞伽宗と東山法門」について中川孝氏が、「北宗禅と南宗禅」について篠原寿雄氏が、「牛頭宗と保唐宗」について平井俊栄氏が、「念仏禅と後期北宗禅」について田中良昭氏がそれぞれ論究している。

さらに、禅僧の偈頌については、「修道偈」について田中良昭氏と川崎ミチコ氏が、「伝法偈」について石井修道氏が、「礼讃文・塔文」について川崎ミチコ氏が、「通俗詩類・雜誌文類」について川崎ミチコ氏がそれぞれ執筆している。

さらに、禅僧と注抄と疑偽經典については、「経疏・要抄」と「疑偽經典」に分けて岡部和雄氏が論究している。

さらに、中国禅とチベット仏教については、「摩訶衍の禅」について山口瑞鳳氏が、「敦煌出土のチベット文禅宗文献の内容」について沖本克己氏が、「敦煌出土のチベット文禅宗文献の性格」について木村隆徳氏がそれぞれ執筆している。それぞれの詳しい項目についての紹介は省略するが、一見、それぞ

れ執筆者に人を得て洩らすところがない。

上によって知られるように、本書は敦煌仏典に関するそれぞれの専門家の研究であり、しかも最近の研究成果を踏まえた論集でありながら、読者をして自から広い視野と高い展望を与えるように編まれている。その意味において、本書は禅の側からみた敦煌仏典の総合的研究であり、過去八十年の禅籍研究の総括であると言えよう。

とくに、柳田聖山氏の執筆にかかる「総説」は、「敦煌の禅籍と矢吹慶輝」・「敦煌本六祖壇經の諸問題」を中心に論じたものであるが、敦煌文献が我が国にもたらされた最初か

新田雅章著

『天台実相論の研究』

はじめに

もう短かいとは言えなくなった私の、天台研究生活の中で、『天台実相論の研究』という書名の著述を手にするのは、これで二度目

ら、今日の研究状況にいたるまで、それぞれの先達の占める位置と意義とが詳しく紹介され、敦煌本に占める禅宗文献の意義を一望のもとに展望させるものとして有益であり、また興味津々たるものがある。

筆者としては、本書の大部分の執筆が本学関係者によってなされていることに深い喜びを感じるのと同時に、本学禅学陣のレベルの高められたことに敬意を表し、今後の一層の精進を祈ってやまない。

(大東出版社、昭和五十五年十一月二十七日発行、七五〇〇円、B5版、本文四六六頁)

山内舜雄

である。

一度は、いうまでもなく、石津照璽博士の『天台実相論の研究』である。この書が終戦後まもなく上梓された時は、やつと天台学に研究の指標を樹てた頃で、紙質も装本もお粗